

# 人質

譚詩

フリードリッヒ・シラー

「訳」 小栗 孝則

暴君ディオニスのところ

メロスは短剣をふところにして忍びよつた  
警吏は彼を捕縛した

「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」

険悪な顔をして暴君は問ひつめた

「町を暴君の手から救ふのだ！」

「磔はりつけになつてから後悔するな」――

「私は」と彼は言った「死ぬ覚悟である

命乞ひなどは決してしない

ただ情けをかけたつもりなら

三日間の日限をあたへてほしい

妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ

その代り友達を人質として置いてをこう

私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」

それを聞きながら王は残酷な気持で北叟笑んだ

そして少しのあひだ考へてから言つた

「よし、三日間の日限をおまへにやらう

しかし猶予はきつちりそれ限りだぞ

おまへがわしのところに取り戻しに来ても

彼は身代りとなつて死なねばならぬ

その代り、おまへの罰はゆるしてやらう」

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が

私の所業を憎んで

磔の刑に処すといふのだ

しかし私に三日間の日限をくれた

妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ  
君は王のところに入質となつてゐてくれ  
私が縄をほどきに帰つてくるまで」

無言のまま友を親友は抱きしめた  
そして暴君の手から引き取つた  
その場から彼はすぐに出発した  
そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに  
急いで妹を夫といつしよにした彼は  
気もそぞろに帰路をいそいだ  
日限のきれるのを怖れて

途中で雨になつた、いつやむともない豪雨に  
山の水源は氾濫し  
小川も河も水かさを増し  
やうやく河岸にたどりついたときは  
急流に橋は浚はれ

轟々とひびきをあげる激浪が  
メリメリと橋桁を跳ねとばしてゐた

彼は茫然と、立ちすくんだ  
あちこちと眺めまはし  
また声をかぎりに呼びたててみたが  
繫舟は残らず浚はれて影なく  
目ざす対岸に運んでくれる  
渡守りの姿もどこにもない  
流れは荒々しく海のやうになつた

彼は河岸にうづくまり、泣きながら  
ゼウスに手をあげて哀願した  
「ああ、鎮めたまへ、荒れくるふ流れを！  
時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに  
真昼時です、あれが沈んでしまつたら  
町に帰ることが出来なかつたら

友達は私のために死ぬのです」

急流はますます激しさを増すばかり

波は波を捲き、煽りたて

時は刻一刻と消えていった

彼は焦燥にかられた、つひに憤然と勇気をふるひ

咆え狂ふ波間に身を躍らせ

満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた

神もつひに憐愍を垂れた

やがて岸に這ひあがるや、すぐにまた先きを急いだ

助けをかけた神に感謝しながら――

しばらく行くと突然、森の暗がりから

一隊の強盗が躍り出た

行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺そうといどみかかった

飛鳥のやうに彼は飛びのき

打ちかかる弓なりの棍棒を避けた

「何をするのだ？」 驚いた彼は蒼くなつて叫んだ

「私は命の外にはなにも無い

それも王にくれてやるものだ！」

いきなり彼は近くの間から棍棒を奪ひ

「不憫だが、友達のためだ！」

と猛然一撃のうちに三人の者を

彼は仆した、後の者は逃げ去つた

やがて太陽が灼熱の光りを投げかけた

つひに激しい疲労から

彼はぐったりと膝を折つた

「おお、慈悲深く私を強盗の手から

さきには急流から神聖な地上に救はれたものよ

今、ここまできて、疲れきつて動けなくなるとは

愛する友は私のために死なねばならぬのか？」

ふと耳に、潺々と銀の音色のながれるのが聞こえた  
 すぐ近くに、さらさらと水音がしてゐる  
 じつと声を呑んで、耳をすました  
 近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに  
 冷々とした清水が湧きでてゐる  
 飛びつくやうに彼は身をかがめた  
 そして焼けつくからだに元氣を取りもどした

太陽は緑の枝をすかして  
 かがやき映える草原の上に  
 巨人のやうな木影をゑがいてゐる  
 二人の人が道をゆくのを彼は見た  
 急ぎ足に追ひぬこうとしたとき  
 二人の会話が耳にはいつた  
 「いまごろは彼が磔にかかつてゐるよ」

胸締めつけられる想ひに、宙を飛んで彼は急いだ

彼を息苦しい焦燥がせきたてた  
 すでに夕映の光りは  
 遠いシラクスの塔楼のあたりをつつんでゐる  
 すると向ふからフィロストラトスがやつてきた  
 家の留守をしてゐた忠僕は  
 主人をみとめて愕然とした

「お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません  
 いまはご自分のお命が大切です！  
 ちようど今、あの方が死刑になるところです  
 時間いっぱいまでお帰りになるのを  
 今か今かとお待ちになつてゐました  
 暴君の嘲笑も  
 あの方の強い信念を変へることは出来ませんでした」――

「どうしても間に合はず、彼のために  
 救ひ手になることが出来なかつたら

私も彼と一緒に死のう

いくら粗暴なタイラントでも

友が友に対する義務を破つたことを、まさか褒めまい  
彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ

愛と誠の力を知るがよいのだ！」

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた

すでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た

周囲に群衆が懽然として立つてゐた

縄にかけられて友達は釣りあげられてゆく

猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた

「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ「殺されるのは！

彼を人質とした私はここだ！」

がやがやと群衆は動揺した

二人の者はかたく抱き合つて

悲喜こもごもの気持で泣いた

それを見て、ともに泣かぬ人はなかつた

すぐに王の耳にこの美談は伝えられた

王は人間らしい感動を覚えて

早速に二人を玉座の前に呼びよせた

しばらくはまぢまぢと二人の者を見つめてゐたが

やがて王は口を開いた。「おまへらの望みは叶つたぞ

おまへらはわしの心に勝つたのだ

信実とは決して空虚な妄想ではなかつた

どうかわしをも仲間に入れてくれまいか

どうかわしの願ひを聞き入れて

おまへらの仲間の一人にしてほしい」

〈出典 『新編シラー詩抄』(改造社、一九三七年)〉

① 友達 セリヌンティウスのこと。

② 仆す 倒す。

③ タイラント 暴君。

④ 屠る 相手を打ち負かす。殺す。

【著者】フリードリッヒ・ヒンシャー

一七五九年―一八〇五年

詩人、劇作家。ドイツの生まれ。

【著書】

『群盗』『オルレアンのおとめ』『ウィルヘルム・テル』など

【訳者】小栗 孝則（おぐり たかのり）

一九〇二（明治三五）年―一九七六（昭和五一）年

ドイツ文学者、詩人。東京都の生まれ。

【訳書】

『人間の美的教育について』『死せるマリア』など